

春季福音特別集会（1）（京都）

福音の証者

——マタイ伝第5、7、16、25章、コリント前書第13章——

1992年5月16日

小池辰雄

福音の証者 愛の使徒 賀川豊彦 愛は神から 驚くべき十字架の愛 地球は太陽に絶対依存
徹底的決定的な赦し 愛を生きたか

【マタイ】（私訳）

「44 されど我汝らに告ぐ、汝らの敵を愛し、汝らを責むる者のために祈れ。

45 これ天に在す汝らの父の子とならんためなり。」（マタイ5・44〜45）

「1 汝ら人を審くな。審かれざらんためなり。」（マタイ7・1）

「24 ……人もし我に従い来たらんと欲はば、己れ自身を棄て、おのが十字架を負いて我に従え。」（マタイ16・24）

「40 ……まことに汝らに告ぐ、わが兄弟なるこれらのいと小さき者の一人になしたるは、即ち我になしたるなり」（マタイ25・40）

【コリント前13】（私訳）

1 たとい私が人間や天使の異言を語っても、

もし私に愛がないなら、

私はやかましい鐘や騒がしいどらとなってしまう。

2 たといまた、私に預言する力があり、

すべての秘義とすべての知識とに通じ、

また山を移すほどの全き信仰があっても、

もし私に愛がないなら、

私はむなし。

3 たといまた、私の全財産を施し、

また私のからだを焼かれるために渡しても、

もし私に愛がないなら、私は無益である。

4 愛は寛容であり、愛は情け深い。

愛は妬まない、愛は誇らない、高ぶらない。

5 不作法をしない、利己的でない。

いらだたない、ひとの悪をことあげしない。



6 不義を喜ばないで、真理と喜びを共にする。
7 愛はすべてを荷いぬき、すべてを信じぬき、
すべてを望みぬき、すべてを耐えぬく。

8 愛は断じて滅びない。

しかし預言はすたれ、

異言はやみ、

知識もすたれよう。

9 なぜなら私たちの知るところは部分的、

私たちの預言も部分的であるから。

10 完全なものが来る時、部分的なものはずたれる。

11 私たちが幼な子であった時には、

幼な子らしく語り、

幼な子らしく思い、

幼な子らしく計っていた。

成人となつてからは

幼な子らしいことは捨ててしまった。

12 私たちは、今は鏡で謎めいて見ている。

私の知るところ、今は部分的である。

しかしその時には、私が完全に知られているように、

完全に知るであろう。

13 そういうわけで、いつまでもながらえるものは、

信、望、愛の三者である。

これらのうちで最大なるものは愛である。

●福音の証者

今日は「福音の証者」という題です。キリストの福音の証し人。プロテスタントの日本の歴史で先鞭をつけた人は、京都に関係のある同志社の新島襄先生です。新島先生はアメリカに渡つたというから、私は太平洋を渡つて行つたかと思つたら、あれは上海を通つてシンガポールを通つてインド洋に出て、マダガスカルを横つて、希望峰を回つて、大西洋を横断して、ボストンに行つたというコースなんです。私はそんなことを知らなかつたので、びっくりしてしまつた。そういう熱烈たる伝道者です。先生は始めは必ずしもキリスト教ではなかつた。ところが、アメリカのアマースト大学に行つて、そのシーリー先生にぶつかつて、福音の世界に入った。新島襄、内村鑑三の二人がアマースト大学のシーリー先生によつて救われた。



内村鑑三の次にでてきたのは藤井武。しかし、藤井武と同じ期に生まれた賀川豊彦。この人のことを私は少し詳らかに読んだ。賀川先生には私は参った。私は内村鑑三の流れですけれども、キリストの、

「己を捨てて己が十字架を負いて」

という、これを本当に実証した福音の証者は賀川豊彦です。その点で認識を新たにし、尊敬を新たにしました。そこで、私は皆さんにこれから、賀川先生の生涯の大事なところを「福音の証者」としてお話ししながら、聖書の中に入っていきます。

●愛の使徒 賀川豊彦

賀川先生のお父さんは、純一というんですが、商売をやっていた。奥さんと性格があわない。ところが、芸者益栄と――別の名前は養生かめという――仲良くなってしまうと、第三子、賀川先生が生まれた。だから、賀川先生は私生児です。お父さんは、

「この子は豊受大神のお陰だから、豊彦と名付けよう。この子は出世するよ、神さまの子なんだ」

と妙なことを言った。もちろん、キリスト教の神ではないけれども、不思議なことを親父さんは口走った。

友達と遊んでいると、賀川先生は小柄だけれどもなかなか強い。

「お前は強いよ、だけど、妾の子じゃないか」

といって、少年たちにあざけられた。私も小さい時に父を亡くして父親がなかったので、「親父なし」なんて言われた。彼も除け者あつかいにされた。

そのうちに、父親もその芸者のひとも亡くなってしまい、兄弟がみなバラバラに分かれてしまった。正妻はみちという人ですが、その人のところに預けられた。ところが、別なお母さんの子供だから、正妻のみちが豊彦を非常に虐待する。徳島の実家に引き取られたのは、明治26年1月のことです。その近所に吉野川が流れている。そこで蟹や田螺を相手にして、「お前たちも……」と言って、ちょうど啄木が蟹を相手にしたような具合に。けれども、彼は頭が良くて、学校ではいつもトップです。皆にけなされていたが、小遣いさんの娘さんにふじえという女の子がいた。これだけが優しく語りかけてくれた。ところが、このふじえという女の子も肺病で死んでしまった。彼は非常に悲しんだ。けれども、兄貴が

「お前は優秀だから、徳島の中学に入れるぞ」

と言ったので受験したら、その通り入ってしまった。この徳島の中学で、米国の宣教師のドーガンという人、もうひとりマヤスという人、この二人に非常に顧みられる。特にマヤスさんは豊彦のために精神的にも経済的にも面倒をみてくれる。

私は思うに、芸者で妾の母でありましたが、この女性は素晴らしい女性であった。

大体、素晴らしい人物のお母さんというのは、魂が、素質が良い。私は伝記を読んで、



それでないのはほとんど知りません。リンカーンのお母さんも素晴らしい。ゲーテのお母さんも素晴らしい。だから、日本の教育は女子教育が本当は大事なんだ。

才色兼備の女性。偉人の母親は、心と魂のすぐれた女性であることは、伝記を読むと、古来ほとんど例外がない。神は道ならぬ道をもつてしても、優れた女性を選んで、神の歴史に御業をなし給う。マタイ伝劈頭を見ても、キリストの系譜に書いてある。「サルモンは遊女のラハブによりて」とか、「ダビデはウリヤの妻によりて」とか書いてある。問題は要するに、母親の質が非常に影響する、大事なことだ、ということ。エラスムスもそうです。それから、仏教でいうと、親鸞がやっぱり私生児だ。

けれども、彼は自分は生まれなかった方がよかったと、ヨブのように非常に苦しんだ。自分のお母さんは素晴らしいと思ったとは思わなかった。

ところが、ある時、教会の先輩森茂という人が墓場で、

「こんな所でどうしたんだね」

と声をかけた。豊彦の手をとって夕日を見ながら、「夕日落ちて空暗く」の讃美歌を森茂が歌いだした。ねぐらに行く鳥の姿を見て、マタイ伝の「空の鳥を見るがよい」の聖句を付け加えて、大いに慰め励ましてやった。森茂は何かしら布団包みを背負っていた。

「なんで、そんなものを持っていらつしやるんですか」

「ちよつと面倒見て上げたい人があるのね」

と、その先は何も言わない。けれども、その夕方の森茂との会話は、賀川さんに一つの希望の光を与えた。

1904年(明治37年)2月21日、豊彦は全生涯をキリストに献げんと決意し、徳島教会でマヤス博士から受洗した。日露戦争勃発の月、多くの青年が戦争熱に燃えている潮時に、反戦的な受洗である。これは実に彼の生涯を貫く福音の宣戦布告だ。絶対無抵抗の愛の戦いである。十字架を負う血の道行^{みちゆき}である。彼は読書で敵国のトルストイを知り、その徹底した無抵抗主義に感動した。彼は、神無き社会主義ではダメなこと、神無き自由主義もダメなことを洞察。本当の霊的な中道を目指している。

今の日本の民主主義なんてのは、神無きだ。「アンダー ゴッド」(神の下で)と、ちゃんとリンカーンは言っている。

「神の下におけるところの

政治で、その政治は、

民の、民による、民のための政治でなければならぬ」

ということをリンカーンが言った。日本の民主主義は「アンダー ゴッド」を抜かしている身勝手主義で、いつまでたつてもどうにもならない。教育も政治もダメだから、日本の天候も三月からおかしい。人間の魂の世界がおかしくなると、自然もそれによっておかしくなる。自然界と人間界は相連なっていますから。星の世界だってそうなんだ。



旧制中学卒業前の野外訓練に際し、彼は銃を投げ捨てた。体育の教官が、

「銃を取れ」

「いやだ、人殺しの訓練なんか受けたくない」

教官は鉄拳を二つ三つ浴びせた。豊彦はその為に鼻血を流した。

「貴様は非国民だ」

無抵抗の生徒を地面に叩き倒した。

「こいつは国賊だ」

豊彦の身体を蹴飛ばした。

中学を卒業する青年が、「銃は取らない」と言って、捨て身でもって抵抗した。私は本当に素晴らしいと思う。頭が下がります。

叔父が彼の受洗を知って、豊彦を家から出した。金を送ることも止めた。帰る家もない。マヤさんがまた助けてくれました。東京にでかけてきて、明治学院の高等部神学予科に明治28年春、入学しました。猛然と勉強する。読書をものごくやる。図書館のめぼしい本をどんどん読む。一日一冊づつ読んでいった。非凡な読書力。神学、哲学、文学と広汎に渡って。重要な箇所は書きとめておく。

私も賀川先生の講演を聞いたが、メモを見ることなく、数字に到るまで自由に正確に列挙されるのには驚いた。博覧強記、文字通りの実力だ。その源泉は明治学院時代からだろう。

「賀川は歩きながら語りながらも読書する」

そんな言葉が友人の間で交わされる。目的に向かつての邁進だ。読書また読書。珈琲店で談話の暇などはない。彼の親友は、加藤一夫、村田四郎、佐々木邦、中山昌樹……。

徳島に帰省した時、例の先輩森茂に会いたかったが、不在。マヤさんを訪ね、

「森茂さんが墓場のそばを通るさに私に会い、『面倒を見なければならぬ人が』

と言ったのは何の為だったのですか」

とマヤさんに聞いた。

「それは癩病人です。町はずれの寂しい所に小屋があるので、彼はその人を訪ね、着物を着せたり、身の回りの事をしたり、食物を食べさせたり、キリストの愛をそのまま黙ってやっていたのです。彼は戦争に召集されたので、戦地から十日に一度の煙草銭を使わずに貯めて、それを私の所へ送って、『あの癩患者が飢え死にしないようお願いします』と。もちろん、私は代わりにいろいろやりました」

マヤス博士は微笑をたたえてそう言った。この話を聞いて、豊彦の全身に火が燃えた。森茂の愛の火だ。休暇を終えて帰校した豊彦は、この火のために別人になっていた。森茂の愛の行為に、具体的な愛の行為に参って、豊彦は変わってしまった。読書はもちろんしているけれども、今度は、しっかりと祈る、深く祈る。そして、パンに飢えている人、絶望的な病人のため涙を流して彼は祈った。そして、具体的に出掛けて行く。賀川が時々姿を消



すので、ある時、中山昌樹が後をつけた。学院の東の谷のボロ屋の乞食を訪ねて、豊彦はその子らに飴菓子を分けている。讚美歌を歌って聞かせる。咳をする病人に財布の小銭をみんなやってしまう。寒い寒いと言っている子に自分の着物を脱いで遣る。賀川は段々ボロ着の人になっていく。それを見かねて、ある婦人が彼に着物を贈ったところ、それも谷間の子供に遣ってしまった。

何やかやと、貧民の病犬のためにまで尽くしたあげく、彼自身、血痰微熱に冒された。ついに、病身を顧みぬ働きのため、肺出血、発熱四十度。医者は絶望とみて、親類に危篤の打電せんとした。その晩、奇跡的に危機を脱して助かった。豊彦はその晩のことを後で語った。

「私は死を予感した。魂が次第に肉体を離れてゆく。すると、光輝く美しい広野に導かれた。パウロやパスカルが神を見て歓びに酔ったのも、こういうことだと思つた途端に、急に地上に引き戻されるのを感じて目が覚めた」

その体験で、彼は神の特別な憐みを、死から生への呼び戻しを感謝をもって自覚した。

やがて『鳩の真似』という自伝的小説を書きあげた。石油箱を重ねて机として、古雑誌を原稿用紙として、毛筆で書いた。これを浄書して、浄書した原稿を携えて、明治学院の先輩島崎藤村を訪ねた。これを読んだ藤村は彼に送り返して、これはあなたが出世なさるまで大切にしまっておきなさい、と心からの添え書きがしてあった。藤村の言葉に従って、彼は時機を待った。

明治42年初秋、神戸に帰って、神学校のコースを続けた。彼の身体は過労の余波のため、今度は、悪性蓄膿症に襲われ再び危機に直面。死線を越える。危機の夢の中、今度は明治学院時代に面倒を見た皮膚病の犬が現れ、彼によりすぎる。「次郎、お前どこにいるんだ」。乞食の子らもボロを纏って現れた。癩病人も杖にすがって現れた。浮浪者や酔漢がよろめいて来る。みんな悲しげな顔つきで彼を見る。

「神さま、もう一度、私を助けてください。気の毒な人たちのために働きたいのです」

夢の中で賀川は切々と祈った。すると、これらの人々の姿が霧の中に消え去り、かくて、彼はまた奇跡的に回復し始めた。一カ月の後に退院したが、まもなく結核性の痔疾に罹った。今度は、京都大学病院に入院。病床で「ジョン・ウェスレー伝」を読み、深い感銘を受け、新たに祈りに入った。癩患者の面倒見の森さんの幻を見る。この病床で彼は決意した。新川の貧民窟で人間界のどん底に身をおいて、キリストの愛を身証せんことである。

1909年(明治42年)のクリスマススイブに賀川豊彦は木綿の筒袖姿で布団、衣類の行李、書籍と戸棚を乗せた荷車を自分で引っ張りながら、新川の貧民窟にやってきた。しかも、十軒続きの長屋の東から二軒目のボロ家の前で、人力荷車を彼は止めた。ここは貧民窟最低のアバラ屋だ。表が三畳、奥が二畳の一室で、血痕の飛び散っている模様、前年殺人の惨事があった由。その証拠は、夜に出てくる幽霊だ。そのため店子がとんとつかない。大



家の曰く、これを借りる勇あらば家賃は月に二円なり。そこで、賀川は直約束。もともと棄身の人助け、キリストの愛、聖霊の身証だ。一枚一円二〇銭の古畳を三枚敷いて、荷物をやっと運び入れた。その晩はランプもなしに眠り込む。二日目の夕刻、浮浪者が三人(植木、林、丸山)やつてきて、泊めてくださらぬかと、名乗りでた。賀川は、ああどうぞ、と同居をゆるす。

マヤス博士からおもちやの行李が二つ来た。クリスマス・プレゼントというわけで。子供たちを呼んで分けようとすれば、奪いあう。ダメダメ、おもちやが壊れてしまう、目茶苦茶になるよ。耳あらばこそ、浅ましい哉。おもちやに飢えている彼らだもの、壊したおもちやを手にとつて、それでも彼らは大満足。

年の瀬の27日、阿波屋の二階で、クリスマススの祝をといて集めた百人ほどの貧しい人たちに手拭いと菓子袋を分け与えた。彼らは嬉し涙で、賀川と昔なじみの人のように語り合う。

その晩、合宿の植木が五円貸せと短刀を賀川に突きつける。賀川は、そんなお金はないと断る。丁度その時、林が帰ってきて、林と植木のとつ組み合い。植木は引き上げたが、暴力団の園田を連れて戻つて来て、園田は賀川に縄張り荒らしだぞと詰めかかり、殴りつける。七輪を蹴飛ばし、障子をぶち壊し、刃物を手にして賀川に襲いかかったから、賀川は海岸に逃げた。夜釣りの明かりの火が見えてきた。神に新川を愛する勇気を切願し、深く祈つてキリストのみ力にあずかった。戻ると、園田はまだあぐらをかいていた。七輪の火を起こし、食事の用意をして、あるつたけのものを出し、園田さんと呼びかけて、気の済むまま食べさせてやった。やくざの文句を聞きながら、自分は新川が好きなんだよ、と。賀川の本気の言葉に相手もやつとおさまった。箆筒の奥の全財産二十円をそのまま握らせた。恩にきまずぜ、と一言吐くや出ていった。

子供が

「老婆が土間にいて泣いている。てんてい(先生)、来てください」と言ってきた。行つてみた。首吊りして自殺しようとしたところが、その縄が切れてしまったということ。そして、これも助けてやった。

けれども、そういう所にいながら、彼は勉強している。勉強は止めない。

その頃の賀川豊彦の日記を書こう。朝の5時から青年教育。7時から貧民窟の病人見舞い。後の午前は執筆専念。午後は病人の世話、子供との遊び、無文者や眼病人の戸籍届け等の代筆、役場行き、時には、葬式の司式一切。もちろん、ただでやっている。夕べの6時から夜学の先生。夜の8時から辻説法。9時頃帰宅。読書して祈つて眠る。

これが日課だそうです。凄いな。

それから、「天国屋」という飯屋を開いて、割合はやった。ところで、芝ハルという女工が福音印刷会社にいた。彼女は伝道者賀川の度々の話にいたく心をうたれた。伝道者の御



霊の火に燃えた目は、感動して聞いている目と相照応した。この伝道者は決してもったいぶらない。

「私はね、新川に住む乞食の親分ですよ」

彼は度々の病で顔はまだ青白いが、目は光っている。破れた粗衣に破れた袴、二人は身の上話をしあつた。女工は実は印刷会社の社長の娘。賀川の過去は小説より奇なる劇そのもの。彼女の胸には敬愛の火が燃えてきた。

賀川とハルの神的な愛が病者を治した。神はこの事により、二人の心を近づけた。ハルは賀川のもとで働くことを申し入れた。

「来るなら結婚のつもりで来てください」

賀川の方からそう言った。

そして、聖霊の愛が結んだところの結婚になる。賀川さんは半分、病身みたいな人ですけどね。それで、神戸の日本キリスト教会で、マヤさんの司会で青木澄十郎さんの司式で結婚した。救世軍の山室軍平さんから袴をもらった。

二人は人力車に乗って新婚旅行だ。

「いざこへ」

と車夫が言った。

「新川の貧民窟へ」

車夫は耳を疑い、また聞いた。賀川は大声で

「新川の貧民窟だよ」

これが新婚の旅路である。世界に類いなきところの新婚旅行です。これが賀川先生の生き方の象徴みたいなものです。

どん底社会での愛の奉仕はいつまで続けても、根本的な救とはならぬ。この事に気が付いた賀川は新しい啓示を受けた。彼は、貧民窟を如何にしてなくするか、その研究のためにアメリカ留学を決意する。アメリカへ行って勉強する。ハルは横浜の共立女子神学校に勉強に行く。

丹波丸で神戸を出帆する。ニュージャージー州のプリンストンに着いて、世界的なプリンストン大学を受験した。ところが、その答案を見て、試験官がびっくりした。試験官が知らないようなことを賀川がその答案に書いた。こんな答案を書くようなものはいない、といて驚いた。それくらい彼は、それだけの実践をしながら、勉強はしよつちゆうしている。それで、いきなり神学校の籍を得て、しかも毎月25ドルの奨学金がもらえて、また一日一冊の英書をどんどん読んでいく。伝道的な実践者でもあるし、優秀な頭脳でもあるので、同級生がびっくりする。そこで、優秀な学生たちの「カルビンクラブ」という会の会員にされる。一年でもって早くも、「マスター・オブ・アーツ」の資格を得てしまった。そして、「バチエラー・オブ・デイヴィニティ」も問もなく貰ってしまう。お金は相変わらずないも

のだから、仕事をしながら、段々旅費をつくりながら、汽車にのって大陸を横断して帰ってきた。

ハルの妹のふみという人が、彼の留守中によくやってくれた武内という人と結婚しようと思ったところが、武内の叔母さんが非常にハルの妹のふみを虐待する。それでとうとう、喀血か何かで死んでしまう。ところが、賀川さんの奥さんの妹も立派な女性で、「あの叔母さんにやさしくして上げてください」と言つて死んだそうです、虐待されながら。

ふみはこの悪の地上に咲くには余りにも美しい花であった。賀川さんも涙を流したけれども、この話を聞いて、それが虹に変わった。彼の小説に『一粒の麦』というのがあるが、その主人公の芳江というのがこのふみさんのことです。賀川さんはたくさん小説を書いている。

それから、トラホームに罹ったり、目がおかしくなる。労働問題の解決のために、彼は先頭を切つてやる。けれども、賀川さんのはいわゆる社会運動ではない。彼のは、福音を土台としたところの、不当な事に対するところの、実践的な抗議なんで、神の義によるところの労働運動です。東京でもあったけれども、そんなのとは性質が違う。神の愛に基づくところの社会主義で、いわゆる社会主義ではない。そういうところを、賀川さんを誤解してはいけない。この頃はいろいろな苦しみがあつて、親子心中があつたり、世の中は随分犯罪があつたらしい。労働組合から、消費組合運動もやつたりする。ところが、賀川さんの、よつてきたるところの土台を受けるところの人たちではないものだから、せつかくやつても、それが本当の結果になかなかならない。それはルターの農民運動と同じことだ。そこで、とうとう賀川さんは、『鳩の真似』というのを、後それから少し変えて、標題も『死線を越えて』と改題して、『改造』という雑誌に書きました。それがベストセラーになって、百万部くらい売れた。一躍、単行本になって出版された。

「万よろずのこと時あり」

で、正に島崎藤村が言ったとおりになった。彼はこの印税をかわいそうな人たちや、社会運動のために全部費やす。

小説にして小説にあらず。波瀾万丈の賀川の生活体験から裏づけられたところの告白文学です。私も読みましたから知つてます。あの頃は私は感動した。ドイツ語の訳もでた。その後で、『太陽を射るもの』という続編がでた。

賀川さんのは決して暴動ではない。暴力は決して使わない。それを暴動に誤解されて、警官がやってきて、賀川さんを逮捕してしまう。賀川豊彦は逮捕されて刑務所に入れられてしまう。次元の違ったところからくる迫害です。幾多の悲劇はこういうことであります。それで、賀川が牢屋に入れられたことを——賀川さんは立派なものだから、牢屋の獄吏が「賀川さんは本当に神さまみたいな人だ」と言つたという——松岡洋右が聞いて、

「冗談じゃない。賀川を出せ、もし出さないなら、俺が代わりに入る」



と言って、賀川さんを牢屋から出したという。満州問題では松岡さんというのはちょっと問題もあった人だけれども、そういう一面もある人です。

終りはもうほとんど目が見えなくなる。けれども、霊眼でものを見ていますから。

東京の大震災の時にも、朝鮮人が井戸に毒を入れたなんていう流言で随分犠牲がでた。あの事に対して賀川さんは憤慨して、救護運動をする。かわいそうな人たちのために、お寺のそばに、着物のない人たちに着物を持っていつてやる。それで、お寺の坊さんに

「ここを使つていいですか」

と聞いたたら、

「ああ、結構です、どうぞ」

と。ところが、その坊さんが言うのに、

「私は耶蘇は本当は嫌いなんだけれども、あんたみたいな耶蘇教は大変なものだ。

私は大いに賛成だ」

と言って、その坊さんが賀川さんを誉めて、逆にお賽銭を大分くれたらしい。そういう、本当にキリストの僕として、キリストの愛の実践者です。

●愛は神から

それで、少し聖書の方へ入ります。前に、私は『福音の心臓』（曠愛新書第1号1965年刊）というのを書いた。これは、パウロのコリント前書13章です。

【コリント前書第13章】（私訳）

1 たとい私が人間や天使の異言を語つても、

もし私に愛がないなら、

私はやかましい鐘や騒がしいどらとなってしまふ。

2 たといまた、私に預言する力があり、

すべての秘義とすべての知識とに通じ、

また山を移すほどの全き信仰があつても、

もし私に愛がないなら、

私はむなし。

「たとい……であつても」とパウロは言っていますけれども、パウロは事実そうであるんです。そうでありながら、

「そんなものよりも愛こそが大事なんだ」

ということを行っている。この「たとい……」というパウロの言い方もそういうことです。

3 たといまた、私の全財産を施し、

また私のからだを焼かれるために渡しても、

もし私に愛がないなら、私は無益である。



4 愛は寛容であり、愛は情け深い。

愛は妬まない、愛は誇らない、高ぶらない。

5 不作法をしない、利己的でない。

いらだたない、ひとの悪をことあげしない。

6 不義を喜ばないで、真理と喜びを共にする。

7 愛はすべてを荷いぬき、すべてを信じぬき、

すべてを望みぬき、すべてを耐えぬく。

「…ぬく」というのは私が付けた言葉です。

8 愛は断じて滅びない。……

素晴らしい言葉です。この8節まででいい。もちろん、これは「聖霊の愛」です。ヨハネ第一書の4章に出ているとおり、

「愛は神からきている」

この「愛は神からきている」という断然たる言葉。恋愛もあるし、夫婦愛もあるし、兄弟愛もあるし、友情もあるし、いろんな愛がある。

「どんな愛であつても、本来は神からきている」という大前提を忘れてはいかんと私は思っている。

私の先生の藤井武先生は「恋愛否定論」なんて書いた。あの頃の先生の考えはまだちよつと若い。恋愛否定じゃない。恋愛は結構だ。人間の自然に賜った感情だもの。ただし、その愛は神から来ているんだということ。そういう角度から本当に愛を見ていたのが、ドイツの大詩人ゲーテです。

何も私は藤井先生の悪口を言うわけじゃないけれども、私が大学に入る時に、ドイツ文学をやると言ったら、先生は

「ゲーテは気をつけろ」

と言った。大体、クリスチャンというのはそうなんです。ゲーテは次から次へといろんな女性と恋愛している。けれども、その時その時にのっぴきならないような女性に出会って、彼はそれを愛して、自分の魂がどんどん引き上げられていった。だから、

「永遠に女性的なるものが我らを引き上げる」

という、あの有名な言葉であるの詩『ファウスト』が終わっている。ダンテは一人のベアトリッチェで、ゲーテは幾人だけでも、実は質的には同じなんです。そういうことを言う者がいない。それは、愛は神からきている。もちろん、ゲーテは全部まちがいがなかった、とは言いません。

やれ、アガペーだ、フィロースだ、エロースだなんて、神学者は区別ばかりやっている。そうじゃない。一番大事なことは、愛はどれもこれもみんな実は神さまから来ている、ということ。ヨハネ第一書4章、そしてコリント前書13章の愛がそれなんだ。



我々が受けている理性も悟性も感性も、全部本当は神から来ている。それが、間違った使い方をするから、おかしい事になるだけのはなしだ。それは全部結構なんだ。だから、いわゆる禁欲でも何でも無い。神の栄光の現れるためにいただいているものだ。でなければ、結婚ができません。キリストが結婚を祝福しているのもそういうわけだ。

そういうことで、我々は線の太い信仰を持たなければダメです。パウロのこのコリント前書13章は素晴らしい。

¹³そういうわけで、いつまでもながらえるものは、

信・望・愛の三者である。

これらのうちで最大なるものは愛である。

孔子の「仁」、仏教の「慈悲」——聖書の中にも「慈悲」という訳し方をしていますけれども——要するに全部、「愛」です。ただ、

「神から来ている」

ということですよ。

●驚くべき十字架の愛

この聖書の世界は、人間が考えた世界ではないですから。事実、啓示をもって、神の言葉も神の行為も上から来ている。だから、旧約の預言者は素晴らしい。

「エホバかく言い給う」

と。詩篇は、こつちから祈っている。ルターが詩篇を「聖書の縮図」と言いましたが、それも一面は言えますけれども、預言書は上からの言葉を受けとってそれを伝えている。

何といつても、イザヤ書は凄い。旧約聖書でどれを選ぶかというと、私は文句なしにイザヤ書です。第一、第二、第三イザヤ書、全部で66章。このイザヤ書だけを破り取って、しよつちゆうポケットに入れていてもいいくらいだ。イザヤ書の中には新約も全部入っている。大変なものだ。

私は研究をけなすわけではない。学問として研究は大いにやって結構だけれども、研究にとらわれたらダメです。パウロが言っているとおり、

「この世の小学に惑わされるな」

と。哲学もそれぞれみな結構ですよ。理性、悟性という、いろいろな働きがあるんだ。けれども、霊性の世界が——霊性といつてもキリストの霊性です。そこらの霊とは違う——一番大事なんです。

「私は火を投ぜんために来た」

と、火というのは聖霊のこと。

「この火、燃えたらんには、また何をか望まん。けれども、受くべきバプテス

マがある」



この自分が受くべきバプテスマは自分の血によるバプテスマ、十字架のことです。

「思いせること如何ばかりぞや」

と。あのルカ伝12章49節は素晴らしい言葉です。あれが十字架・聖霊の土台の言葉なんです。

「いろんな霊があるから気をつけろ。偽キリストもいるから」

と、パウロが言っている。色んなのがいるよ。けれども、我々はキリストの中にある。

マタイ伝5章、私の著作集第十巻(『聖書は大ドラマである』1988年刊)でいうと、326頁

だ。「9月10日 敵をも愛する」の項、

「されど我汝らに告ぐ、汝らの敵を愛し、汝らを責むる者のために祈れ。これ

天に在す汝らの父の子とならんためなり。」(マタイ5・44〜45)

「敵を愛せよ」と。キリストは自分を十字架にかけた敵を愛しました。

「彼らを赦してやってください」

と。キリストの中に入ると、敵がいなくなってしまう。敵と思われるやつも、「気の毒だな」としかみえない。次元が違うから。同じ次元でもってどうだこうだ、なんていったらダメです。次元の違ったところに入らないと。

「何とでも言いなさい、一向差し支えありません」

と。だから、私は「第三の罪びとの首」になっている。パウロは、

「我は罪びとの首なり」

と言った。内村鑑三が、

「私みたいな奴が救われたんだから万人は救われる」

と言った。内村先生もいろいろ自分の欠点を知っている。私は「第三番目の罪びとの首」だ。本当の「罪びとの首」はキリスト自身です。キリスト自身が罪びとの首になって十字架に架かってくださった。「罪びとの首」ということは、比較的な言葉ではない。絶対的な言葉なんです。どん底で、

「私はキリストの前に立てません」

と平伏す、本当の平伏しが「罪びとの首」という言葉です。親鸞がそうなんです。

「仏のおしえはもつぱら親鸞の為であった」

と。私も書いたでしょ、

「十字架は誰よりも私のためである」

と。どん底に立たせられると、これが俄然、天国になる。ありがたくてしようがない。ひとのことをどうだこうだと言っているうちは、その人はいつまでたつてもダメなんだ。問題はそんなことではない。

「神—キリスト—聖霊—我」

の縦の関係です。だから、

「敵を愛せよ」



「はい、愛せます。あなたの驚くべき十字架の愛が入ってきてくださっているので、ありがとうございます」

と言えるんだ。何か、ガンバツテ言っているのでも何でもない。大言壮語しているのでもない。よく人が「ガンバレ」と言うが、私はひとつもガンバラない。上から力がきてしまうがないから。

とにかく、至る所、伝道ができる。何も無理しなくても。自分をあけつぱなしてものを言うのが一番いい。遠慮は要らん。

●地球は太陽に絶対依存

パウロ、ヨハネ、ペテロ、ヤコブという、この四人が四色なんだ。無色が四つの色に光っているわけだ。もともとキリストは無色透明だから。無色は無限色ということ。無限の色を持っている。太陽の光が無限色です。

地球は太陽に絶対に依存している。ひっぱり回されている。地球上の生きとし生けるものは全部、太陽の熱と光によって在る。この大自然を人類は自分の欲のために色んなことをやって、段々、害している。神無き文明が行き過ぎてしまつて、とんでもないことになつて、戦争よりか恐ろしい。自然界がダメになれば、動物がダメになる。人間もダメになる。21世紀はどういうことになるか。全世界の人たちが、

「各人が神に帰れ」

という、これだけだ。

「神はどこにいるか。キリストの中に。キリストに來い。どこまでも、キリストを見て神を見ないものは神が分からない」

と、はつきり言います。キリストは、

「我を見し者は父を見しなり」

とおっしゃった。

キリストはお釈迦さんとはケタが違う。お釈迦さんをけなすわけではない。第一流の坊さんを私は尊敬します。親鸞でも道元でも日蓮でもみな素晴らしい。それは仏の世界で、行くところまで行っているから。

あなた方一人びとりは、掛け替えのない存在です。大体おかしいね、日本は。文部省なんてのは、無くたつて在つたつてどうでもいい。とにかく、文部省がもし在るのなら、司法省と同じように、政界から独立させる。文部大臣は人格のある、哲学、宗教、科学を弁わきまえているところの人、そういう人が相継いでいく。学校はたくさん造る。どういう標準もひとつも要らん。或るひとりりの青年が

「自分はこういうことをしたい」
と来れば、



「ああどうぞお入りください」

と、中で鍛えてやればいい。中で鍛えて、それに沿わなかったら、

「どうぞ出ていってください」

と、そういう学校が一番いいんだ。受験勉強は要らない。そういうことにしなければダメだ。聖霊の権威の世界は恐いものはない。本当に神に、キリストに平伏している者は本当の権威を持つ。威張るのでも何でもない。キリストの権威だから。

この召団の方々は——私は召団の枠わくなんか作ってません、召団には枠がない——お互いさま、欠点があつたつて、そんなことは問題でない。

「本当に私はキリストでなければ、生きてられません。この十字架・聖霊でなければ、どうにもなりません」

と、そういう人たちが私たちの兄弟姉妹である。みんな大いに点々バラバラでいいよ、いろいろな花のように。心は聖霊の無色で一つなんだ。

そういう学校にしなければダメだ、日本は。土地なんか全部、国有にしてしまえばいい。国有で、国から借りればいい。個人は何坪までで、これ以上はいかんと。それ位の政治をしなければダメではないですか。

だから、私は詩の上でもつていろいろ書きます。この大告白をしなければ、私は死ぬわけにいかん。使命のあるところには、必ず神さまは生かし給う。あと十年はかかる。ゲーテやダンテみたいな大詩人にはかなわない、詩としては。内容的には負けないものを書くから。

それだから、

「敵を愛せよ」

「はいっ、愛せます。あなたの愛で愛せざるをえません」

と言える。キリストは「敵を愛せよ」と言つたが、愛せよではない。

「愛せざるをえないね」

と。

●徹底的決定的な赦し

その次は、マタイ伝7章1節、「9月17日「人を審かぬこと」の項(第十卷335頁)、

「汝ら人を審さばくな。審かれざらんためなり。」(マタイ7:1)

審くのは神さまだけ。お互いにどうだこうだと言つて審くよりも、

「汝ら、互いに赦ゆるせ」

です。キリストに赦されているんだから、「審くな」という言葉の積極的な言葉は「汝ら、互いに赦せ」です。「審くな」よりもその方がいい。「審くな」というのは、本当は「赦せ」という言葉だ。私たちはキリストに徹底的に、決定的に赦されているんです。過去・現在・



未来の私たちの「罪」というものは、「我執」というものは全部赦されている。「もうそんなものはないぞ」

と。有れども無きに等しい。相対的、人間、小池は罪びとに過ぎない。けれども、その奥にはもう絶対の境地がきている。自分の信仰とか、そんなことではない。キリストから賜ったところの驚くべき境地がきている。ありがたくて、これは何とも表現できない。いわゆる確信ではない。決意でもない。もうこの現実はあるに難くしてしようがない。

だから、そのように私たちは決定的に赦されたから、お互いにどんなことでも赦せます。お互いに本当に十字架の下に来て、解決しないとこの問題はひとつもない。それを、ああだこうだと言って、ほじくっているのがある。情けないものだ、人間というのは。

この驚くべき福音の世界に来て——あなた方、私が話していても、聖霊の世界で、聖霊の光で、力で話しているから、聞いているうちに、ちよつと身体がおかしかったのが治ってしまったでしょう。私が按手しなくなつて、治つてしまふ。

身体で聞くんですよ、耳で聞いているのではない。私は「体受」という言葉が好きだ。体で受けとれと。信仰という言葉は、「信じ仰ぐ」というのはごく初歩の段階だ。ギリシア語のもとの字だつて、本当は「信仰」なんていう、そんな訳ではない。

「それをまこととする」
という字だから。「体受」というのは、

「全存在で受けとる」

ということだ。信ずるのではない。現実を受けとるんだ。現実の世界、現の世界だ。ここにご馳走があつて、いくらご馳走を説明されたつて、ちつともお腹はいっぱいにならない。食べなければ、体受しなければ。ここに水がある。喉が渴いて、水がH₂Oであることが分かつたつて、どうにもならない。これは飲まなくては。そうでしょ。

「我を信ぜよ」

という言葉は、

「我を受けとれ」

ということ。信仰という言葉が非常に躓きになる。観念にズレてしまふ。もう今までの、古い概念で、観念的な使い方をいつまでしたつて始まらない。だから、私は自然に新しい表現が出てくる。

私の言いたかつたことは、「互いに赦せ」ということ。「審くな」ではない。

あのアウシュヴィッツで、ナチスのユダヤ人迫害の時に、あるドイツ人のために自分は身代わりになつて、処刑されたコルベ神父というのがいる。これは本当に文字どおり、捨て身の愛だ。こういう事実によつてみると、私は説明できない。ただ平伏だけです。

ナポレオンがセントヘレナに流されて最期に、

「福音書は本ではなかつた、文字ではなかつた。これは生き物だ。キリストの愛は全世



界を本当に変えていく。しかも、一番やっかいな自己愛というものを消してしまっ、
驚くべき愛だ」

と言った。

「己を愛するは最も悪い」

と、西郷南洲が言っていた。あの南洲はキリスト教をちゃんと受けとっているんですよ。「景教」が日本に来て、中江藤樹も完全に受けとっている。熊沢蕃山とか、そして最後には南洲までできている。南洲が何故、こんな福音的な言葉を言うかと思ったら、やっぱりちゃんと知っているんだ。自己愛が、我執というものが「罪」なんだから。

「生くることが、キリストの証である。聖名を讃えることである」ということです。使徒行伝を読むと、ペテロもパウロも凄いやな。

●愛を生きたか

それから、『第十卷』の351頁(9月30日「生魂の重さ」の項)、

「人もし我に従い来らんと欲わば、己れ自身を棄て、おのが十字架を負いて我に従え。」(マタイ16・24)

「もし我に従い来らんと欲わば」と、キリストは「もし」とおっしゃっているけれども、「キリストに従う」ということは冗談じゃない、大変なことだ。けれども、これは手放しではできません。

「従い来らんと欲わば、先ず、我を受けとれ。そうすれば、己は知らない間に捨てられてしまうぞ。そして、十字架を負う力を私が与えるぞ」

と、こういうわけだ。我々は手放しでこの言葉を守ることができない。

賀川さんがあれだけの捨て身の愛になったのも、その元はそこから来ているわけだ。

それから、第十卷の382頁(10月21日「羊と山羊」の項)、

「まことに汝らに告ぐ、わが兄弟なるこれらのいと小さき者の一人になしたるは、即ち我になしたるなり」(マタイ25・40)

愛は、もの凄い捨て身の愛もあるけれども、小さな親切、心からなす小さな親切もある。それは心からしなければダメだ。

「それは私にしたんだよ」

と。「羊と山羊」の話があるでしょ。キリストが諸々の国人を集めて、牧者が羊と山羊に分けるように、二つに分ける。羊の方に、

「お前は私が飢えた時に、獄に居た時に、病める時に、面倒を見てくれた」

「いつ、そんな事をしましたか」

「いや、いと小さき者の一人にしたことは即ち私にしたことだよ」

と。即ち、天国に入れる資格は、



「愛を生きたか」

だけにある。具体的な愛を生きたか。「愛を生きる」とは、人助けということ。人を救ったり、人助けすること。感情的に愛するということではない。愛というものは具体的なんです。己を与えることだ。何かを与えるとは、ただ物を与えることではない。心をそこに託する。存在的に、

「この人のためなら生命を捨てても」

というような気持がお互いの愛なんだ。小さき愛であっても、大小はどうでもいい。質は全然的なんです、いくら小さくても。

私は「伝道五十年」といったって、大した事ではない。けれども、私は、いい加減ではなかった。とにかく、善意をもってやりました。それが随分誤解されたこともある。どうでもいい。私の集会からいろんな人がいろんな理由で出ていった。結構です。問題は、

「本当にキリストのもとに行っているかどうか」

それだけです。小池がどう思われてたって、そんなことは構わない。本当に私は時々そういう人たちのために祈っています。聖霊の世界は、そんな詰まらない人間的な分け隔てはないですから。

「ああ、気の毒だなあ」

という。本当に生きて、

「いやあ、先生、やっぱり、本当でした」

なんて言って、やって来るかと思つて。

とにかく、召団の皆さんはそれぞれの特色をもつて、「キリストの証者」となつてください。人生の目的は一人びとりが証者たること。その内容は、一人びとり天下一品です。比較は要らん、人真似は要らん。そして、大きなハーモニーになる。全体を統一しよう、なんて大間違いだ。とんでもない。それぞれの特色をもつてする。プロテスタントでいいんだよ。全体主義ではないんだから。花がみな、全体主義で、バラの花だったらどうにもならない。百花繚乱。いろいろな樹がある。日本は自然が豊かだね。日本の自然を見て、真理をどんどんつかまなくては。

「ああ、ここに福音が語られているなあ」

と。ゲートルは、

「自然は神の本だ」

と言つた。もう、私は満ち溢れているんだ。「プレローマ」という。

どうも、ありがとうございます。おわかります。

